

# Alma Mater SAPIENTIA

## 英知大学同窓会会報

Vol. 8 Oct. 10, 1997

発行：英知大学同窓会兵庫県尼崎市若王寺2-18-1

発行責任者：野村裕

編集：英知大学同窓会

- 4期を通り過ぎて……………1
- 学長挨拶……………2
- 1997ホームカミングデイ…2
- 土曜講座のお知らせ……………3
- 交流スポーツ大会の報告……………4
- 英知から松本清張賞！……………5
- 関東支部だより……………6
- クラブ紹介……………7
- これから(前田貞夫氏)……………7
- 留学生からのお便り……………8

# 4期を通り過ぎて

同窓会会長 野村 裕

日頃の同窓会に対する、ご支援、ご協力、ご声援を深く感謝いたします。

新役員体制になり、4ケ年が過ぎようとしております。何もわからないまま、役員一同協力のもと、「基本的組織の充実」を柱に、努力してまいりました。

まず、事務局の設置と拡充、会員名簿の整理作成、在校生の準会員化、大学院生問題、同窓会会費の安定的収入制度、ホームカミングデイの充実、会報の定期的発行、などなど取り組みが多岐にわたり、ない頭脳をフルに活用し、組織の充実に努力してまいりました。最近では、なんとか初期目標の組織の充実がはかれてきたものと思います。これは、ひとえに大学側の理解と協力、また、事務局(就職部)の皆さまの支えにより実現できたものと考えます。

今期は、さらなる充実をはかるべく、「在校生と卒業生の交流」の場として交流スポーツ大会の開催、大学側の一層の同窓会への理解を深めていただくため「教職員と卒業生との懇親会」を開催いたしました。初期にもかかわらず、期待以上の出席と中身の濃いイベントとなり満足しております。今後、この種の交流の場がたびたび設定でき、ますます拡充され、多数の出席者により盛り上がることを期待して努力するものです。

この1年で、一番の思い出は、役員および事務局で1泊2日の合宿をしたことです。仕事の疲れもありながら、全員が徹夜に近いかたちで朝がしらせるまで、活発な意見交換をしました。若い役員を中心に、日頃、同窓会活動に対する疑問

や存在価値など幅広い話題に集中しました。

この合宿の目的は「同窓会の IDENTITY(アイデンティティ)」を探るものでありました。結論には至りませんでした。が、初めてこのような機会がもてたことを喜び、同窓会の存在価値、活動の意義を少しは理解を深めたものと確信しております。

基本的にはボランティアな活動であり、誰かがやらなければならぬ活動でもあるので、皆さまのますますのご協力、ご支援が我々を勇気づけるものになると再確認いたしました。

ご存知のとおり、わが母校も、今日の少子化の中、生き残りさらなる発展のために努力されています。ここで、わが同窓会、同窓生が、さらなる努力と協力なくして大学の発展はありえないものと考えております。

役員一同、日々の仕事に追われながら、いろいろ知恵を絞り、なにかと母校の発展の一助となるべく努力しております。しつこくなるようですが、今後ともますますのご支援を賜わりますようお願いいたします。



9月24日定例会にて













本学の吹奏楽部は、創部20年になり、今日では部員も15名になっております。

出演の機会も増え、英知祭、尼崎市民まつり、老人ホーム慰問と恒例行事に加え、クリスマスパーティーやハーバーランドでのコンサートなど多岐にわたっています。

また、最近では唯一尼崎市内の他大学である園田学園女子大学吹



**HELP!**  
 讓ってください!  
 英知大学・吹奏学部  
 経済的危機に!  
 楽器が眠っていませんか?  
 遊んでいませんか?



奏楽部との交流も盛んにおこなっております。

つきましては、吹奏楽部の予算では、楽器の修理や譜面の購入などの経費に追われ、思うように楽器の補充や活動ができない状態です。そこで、先輩方のお宅に吹奏楽器が眠っていたり、遊んでいたりにしていませんか。たいへん厚かましいお願いですが、それらをお譲りいただけませんかでしょうか。フルート・クラリネット・サクソス・トランペットなど、吹奏楽に關する楽器であれば何でもかまいません。

また、修理が必要であっても結構です。現在の部に残る楽器は、修理すらできないような状態です。ぜひ、よろしくお願いいたします。

よろしければ、左記までご連絡ください。お願いいたします。

**連絡先**

多々納 達彦 (神・2回)  
 〒655 神戸市垂水区星稜台  
 8丁目4番6号  
 電話 (078) 785-7833

これから



(昭和44年 西文科入学)

村雨貞郎

(前田定夫)

二十数年ぶりに大学を訪れた。建物は増えていたが、全体の印象は昔と変わっていない。ポプラ並木の成長が、過ぎ去った歳月を感じさせはしたが…。

「あの頃から、ここから見る夕陽は最高だった」

同窓会で会った友人のKが、六甲山を見つめながらそう言った。そのとき私は、ほおーと思った。Kの、その頃の淡い初恋を知っていたからだ。感慨は、人それぞれにある。「夕陽が眼に沁みる」私は、Kと違った思いで、西の

空を見ていた。「あの頃に帰りたいか?」そう訊かれたら、答えは「ノー」だ。思い出は、苦すぎる。

そのとき、私が考えていたのは遠藤周作の「わたしが・棄てた・女」のテーマだった。学生時代、私はその本を読んだ。

“本当に、神はいるのか?”

あの頃は、深くは考えなかった。小説を書き始め、ふと、そんな自問に立ち止まってしまふ。人間とは何か?と。

「これから、どうしよう」何度、何十度とそう思ってきたか…。

これからどうしよう…。そんな思いは、今もある。

山本周五郎の小説に「将監さまのほそ道」というのがある。

“岡場所”で働いている女主人公が言う。「五十年前…」わたしは生まれていなかった。と。そして「五十年あと…」わたしは生きていない。と。どんな哀しみも、その間のことだと。もし神がいるのなら、人間の失意も栄光も、神の一瞬の瞬きにすぎない…。そんな気がする。ポコ・ア・ポコ、でやっていくしかない。







# 留学生から お便りが 届きました

同窓会では毎年、留学生を支援するための奨学金を出しています。留学生からの礼状も今回が初めてではありません。今回、同窓会活動をより深く皆さまに知っていただくとうと、寄せられた礼状の一つを紹介します。

私たちにとって、後輩からの便りをきくことは学生時代を思い起こし、なつかしい思いがします。語学の勉強に明け暮れた日々。そして初めてその言葉が通じたときのよろこび。私たちの誰もが一度は経験していることでしょう。今、私たちの後輩が、そんな努力を重ねる日々のまっただなかにいるようです。苦しさの中に喜びがあり、つらいことを乗り越えることによって明日にはより大きく成長していることでしょう。そんな留学生たちに心からエールを送りたい。同窓会からの願いです。

Angers, le 10 août 1997

## 残暑お見舞い申し上げます

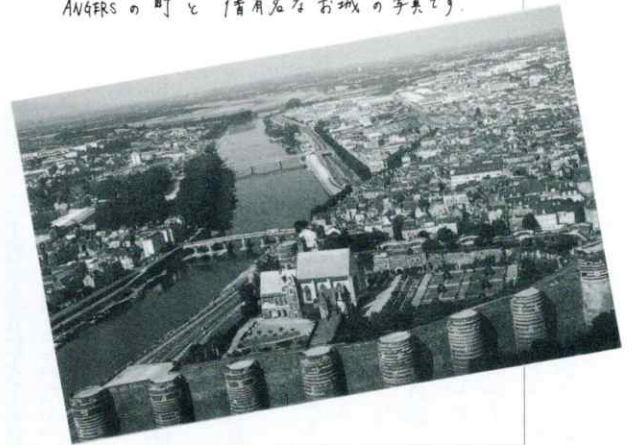
今日、留学奨学生として採用されたいうれしく思っています。  
留学してはや6ヶ月が過ぎ 自分でも驚いています。  
来日当初 2月～5月は大変 つかれました。  
日常生活 全てに フランス語が 関わっており、衣食住が困難でした。授業中 先生が言われた宿題 1つに1つ見当違いなことを やっていたり、先生が言われた質問の答えではなく 質問自体が 分からないことが 数多くありました。何をやる為の手段である言葉が 欠けたのは初めてのことで、なんと 涙を流す 初めての経験でした。独自のフランス語で はしゃぎ 先生が 通じない になりました。今でも、みんなの 英語に入っているが、フランス語が 理解できません。 一人 出来ないのが つらいところです。  
さて、この8月ですが 夏休みで、友達や家族が フランスに来るのを 待っています。 夏休みや 暑さの 為、 ぼーっと していますが、 奨学生として 採用された という 通知を 機に 自分を 新しく 頑張りたい と思います。

日本の残暑は厳しいと思いますが お体に気を付けて下さい。

さぶら

## 追伸

ANGERS に 来られた こと 知る かも知れませんが 葉書 を 1枚 同封 しておきます。  
ANGERS の 町 と 1番 有名 な 石城 の 写真 です。



## THE EDITOR'S COMMENT

前回の会報でお知らせした「4月13日、阪急芦屋川に集れ」の企画は、残念ながら参加者が集まりませんでした。

当日、会報に記載した私と、発案者の前中氏との二人で芦屋川駅に集合し、参加される方の来るのを今か今かと待ちかまえておりましたが、結局どなたも来られませんでした。残念でなりません。

私と前中氏とはそのまま帰るわけにもいかず、二人だけで春の六甲山を楽しんできました。当日は天気も良く、清々しい気候でした。あまりに天気が良かったためか、途中のロックガーデンでは岩の間を軽快に歩き回る野性のイノシシを見るなどのハプニングもありました。丸々と太った元気の良さそうなイノシシです。彼らは多くの観光客の間においても全く臆することなく、堂々としていました。まあ、

六甲山は彼らの家のようなものでしょうから、我々が彼らの庭をお借りして歩いているといった表現の方が正しいかも知れません。

私達は、山頂に立ちとくとや街道を通って有馬へとぬけました。ここちよい疲れを楽しみむことができました。その後有馬温泉と温泉の後のビールの味は格別でした。ビールを飲みながら、今回のような企画を、たとえ不発であっても続けなければならないと話し合ったものです。

会報も8号を数えるに至りました。毎回、よくでき上がったものだと胸をなで下ろすばかりです。今回もそうでした。ご協力頂いた皆さまに感謝いたします。

英知大学同窓会 大月 力

